



卷之首

物

序  
自註

見

年

1814  
1





5  
1814  
1

特

物車自



貴子代も松風抄と云くも之を習ふは  
 一和して一十二律と云くぬとやそれと  
 中分の人の身一は物よつこ目出度大  
 せ多くうんとうや申一統の奇よい六  
 義十辨とてあまぬ染もを能讀も云  
 枝本のこもうんといとておのたうと  
 一とて信うんといふ一故人の書も  
 一とて統の連歌をじう一のみ師分新  
 一とて一毎定めをい一とて也能讀則と



中よりとも風情と物象とつとて大  
 うつらふとあ一と統の今時都鄙一能  
 を弄事己の西と盛一又吾中よ句  
 善悪といふ人多く一といふと一と心  
 一とて一とて一とて見各別なう一とて  
 冬と天鳥鬼衣水ととりよ一とて初  
 学い書田とととと一とて一途一との  
 うたより京乃隙をわあ一とてか紙懸一と  
 互に口傳はのつとて持解れうまあ一と









方山のついでにきくは後集のついでに  
方山

かゝのよきとを言葉とていふつらうはまこと  
しつ後と非とてんや足杜詩の句の退字  
は各あつてはつらうとていふとて田舎の  
一のよきとを言ふとていふとていふとていふ  
可よあつて人さつこのまこととはつらうとて  
法よよまよとていふとていふとていふとて  
且とのれつとていふとていふとていふとて  
と奥を宗匠の句と始はつていふとていふと

若くはつらうとていふとていふとていふとて  
何つれとていふとていふとていふとて  
とていふとていふとていふとていふとて  
所の長きとていふとていふとていふとて  
とていふとていふとていふとていふとて  
を此とていふとていふとていふとて  
何れとていふとていふとていふとて  
とていふとていふとていふとていふとて







下ノ投ニ維時元禄三庚午ハ少々中秋盡  
雖澁橋頭隱士歩雲子叙



秋乞之雜諧

自註

三月月乃わりのとを料を紙巻

又陽よびのふ三日の月紙巻わくは  
らんあつとちわふのきを月のさ  
次第に濃なるして真をうたぐらふ  
なよ月の料も作は信

花乃辰つりたるし葉は花

花のりりるをその都のきとに  
よ色も葉葉の花れいふと  
ゆふし御の御はわくじや

五香をかほはるはかり



杖よまは竹の根をききあて

杖よ切<sup>き</sup>かきあてして竹の根をききあて

句まの

まは竹の根のうらりとをききあて

竹をききあてたのうらりとをききあて

怪振と鷹は人のとまひ

怪人のひく竹杖をかきあて

雨やうらむちりしをききあて

わらわは向してたうひのうらむちり

わらわは向してたうひのうらむちり

らとまひをききあて

山むらりあえ糸をほほなると

山むらりあえ糸をほほなるとは城<sup>しろ</sup>は

かたはほほなると出入りまはるゝ人の

ほほなるとはほほなるとの中あとも

左とれまひの糸をほほなるとのほほなると

付煩むしてまひの糸をほほなると

草の舞臺の衣装備は

一ひらひの草を舞臺の衣装備は

草を舞臺の衣装備は

草を舞臺の衣装備は

草を舞臺の衣装備は

草を舞臺の衣装備は



福清一糸のし日とむらぐ航

古来ヨリかく村合スヤむほきれも  
むらぐらぐのしるるるるるるる  
ちく村燭ひて如珠

賀け屋敷よ枕まろく坊

祥子月のおろれはあはれ  
まきとろくくと陰の目ち梨糸  
もあさひーわんとなりいりて  
あひの舞に抱きくせな  
付しほまてはる

婦のんは鏡をちりまのた

帯の附しあはき不足難

踊くは秋しまじいよ

きねまのし葉あてはまこ  
幻が娘と見うくとまがま  
踊ききり附物ちれも下の  
假ちあてあひのしは  
とまはばちむらぐらぐ  
舞のむもははのしは  
むこのまてはむらぐらぐ

標本てもあ浮り町と町

西陣はあつと踊場とらまは  
わのしとるるるるるる  
あひらまては

はらけは



妙實出とく人の月のおやまた

あ句註成りて附合と

時ヨかむのこころこころ

親の目よほまぬるらひと丸

至夜のワラリおくかくまて

家まじ家業のふかむしが親の目

おはわすぬかやまのたのひと

附れきて壯年と云らん先を親

とく人としてこころ廻り

武士まゝにのいとくとかりひらせ

ま梨一白を唯我物のあらざる

音すきりののはまのふるわき

わを後あやしよむとあうく

その海より水危きまふまよ

付ケ信こ

ね智入猿薮の味淡とを梨

その海よりしてふあむちれとよの徳

と用ひ一白は俺と下んよとらして

付ふるも猿薮の上よりまうは建

は眼つらうとれじ家柄

赤むよらむとして家ゆらう附合

こちからひきとほんまの徒なる

あむま目かの極よわらひ



自註

疎行の難美のうらみはして  
象鼻さうらのりるもとに  
まふらるる附寄

### 新紙くきて為る子紙場

自由書つ註と下とを以て  
わらゝの氣味はあやう

### 去由の思へ浦を附うはて

浪るくは後年と立ててその  
浦くは里出れ網引お領内と  
越して遠網流くま由は  
附は新紙くの板とをい  
ふはくは

### 私借と者よん少也事外

弄や乃わりの私をま野野田  
夫橋の物のはまもとくあ  
常ははかへ橋後流のる下  
孫人の顔ひ流さるなるもあ  
下らち流はさくこもは無新よ  
はまも集

### 一ツ宛教の橋と春はく

あふらるるのうけりてはま

### 結よ又法集の歌

初といはは所弄やの字眼を  
打紙の事外よ初の橋も表つ  
てと付寄まもあやう初と



日記  
い(は)りてははくくも  
お紙紙きこわく  
附題して唯白とありて  
まは平らな梨

有海氣を女が怪し練の内

向素を唯神あふよ夜更して  
信ふ女が怪しこわくふらと付り  
と不夜に註句の面にわくを

意程とくして薬 保定

原氏物語のふと用ひてある  
の女とあつて付き薬下の  
とりてははくくも

ははくくも又も薬よまらる

ゆ中ふあきて能のりなまら

幅じはくもの方橋ツ競 延

右三句自註よまらとほむとほむ  
おこ具打紙と書ゆくまら  
まらのははくくも

薬と煮て賣ら松乃下菴

ゆ押めまらし競るの物ん涼  
とらふのひまの下菴よまらひ  
付ゆ



心伏乃老刀、きうわらうらり月

あめい海たよら海うらぶ都も衆  
人いあよ入てきとほくのいなと  
わらりて落らうらとさのたあ  
是らて後ひ者の事うらうら  
い漁るはとこののいもあうらうら  
おろを物附とさ雲の下龍あ衆  
おめしてま、いまうら白髪のおれら  
とくたは所とわらひいあうら  
わらひあはけやの麻いうらとさり  
道々の謎成カタし附合時  
群々の何あとしあひいあ  
あけれらうら

飛登るねよ極かこうく脚取ぬうん

わまうてまはら所取介後あを  
かくあし靴地あ取ら極よまうら  
まをあをねよ、いまうら足あ取ら海たり  
穢神の造びをと、のた取らうら  
あは身うらまを捨らしをさまうら  
とじつと付齊

あてし本海衣よ澄わらうら執

ねほやまの比澄あうらうら  
あはあわらんのうらうら  
ああしてわらうられま衆あのかあ  
まはあうらと今あせよらうら  
あはあわらひいあせま衆







くまどわしむ様の麒麟

五子 古よりなごらぬよ様の附たり  
雲の芳切を惜テユモリ

武江の桃青今ハ雲海の色よ伝く世々  
祖潜を批判せよやん浪花の轍士  
壬生れ和及ハ予ヲ知故なれいそ伝  
はくす一折坤と河ははるうり  
あまなるまうあひなと一伝き伝  
今とらそのがくといあし解と伝の  
すしを惜こしうとまうり



松堂軒如來





